

日本におけるアクセシビリティ研究を考える： オランダでみた手話研究最前線

坊農真弓^{†1†2}

概要：筆者は2016年4月から1年間、科研費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)の支援を受け、オランダのマックスプランク心理言語学研究所に滞在した。本発表では、滞在先で経験した研究活動における情報保障のあり方や、手話研究の進め方について紹介し、日本で進めるべきアクセシビリティ研究の形を議論する。

How We Should Go Forward Accessibility Research in Japan: A Frontline of Sign Language Studies in the Netherlands

MAYUMI BONO^{†1†2}

1. オランダでの手話研究¹

私は2016年4月から2017年3月まで、科研費の国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)の支援を受け、オランダのナイメーヘンにあるマックスプランク心理言語学研究所(以下、MPI)およびラドバウド大学で手話相互行為に関する研究活動を進めてきた。ナイメーヘンはアムステルダムから電車で1時間半ほどかかる小さな街である。本稿ではこの小さな街で私が体験したことを通し、日本におけるアクセシビリティ研究のあり方を考えたい。

1.1 研究を進めるための言語環境

オランダに来てまず驚いたことが、手話プロジェクトを進める上での言語環境だ。会議やミーティングにはほとんど手話通訳が付いており、手話通訳が見つからないという理由で会議が延期になることは日常茶飯事だった。またMPIには、プロジェクトの技術補佐員や博士後期課程の学生として、手話を生活言語とするろう者がおり、聴こえる研究者も手話が流暢な人が多かった。このような人らの集まりであれば手話通訳を呼ぶこともない一見思いがちだが、ろう者と聴者が対等な立場で学術的な議論をする場面には、必ず経験豊かな手話通訳者がアムステルダム等の大きな都市から呼ばれた。

1.2 国際手話

研究ミーティングで用いられる手話は「国際手話」だった。国際手話は英語で「International Sign」と言う。国際手話は主に、ヨーロッパで各国のろう者や手話通訳者が集まる会議で用いられる。英訳の「International Sign」に「Language」の語がないことから分かるように、国際手話は国際補助語の一つで、言語とはみなされていない。言

語とはみなされない理由の一つに、国際手話に母語話者が存在しないことが挙げられる。国際手話は異なる手話言語を元にした一種のビジン言語で、異なる言語を持つ国が陸続きのヨーロッパでは早くからこの国際手話が用いられるようになり、世界中のろう者が集まるスポーツの祭典「デフリンピック」や世界ろう者会議では国際手話が古くから用いられてきた。私は渡蘭する前、こういったヨーロッパの事情を多少なりとも知っていたので、日本国際手話通訳・ガイド協会が提供するビデオチャットによる国際手話ビギナーコースを受講して準備を進めた。

1.3 手話通訳の突然の遅刻

10人程度で実施したあるデータセッションでは、アムステルダムから来るはずだった手話通訳者の都合が前日に悪くなり、急遽他の人をデン・ハーグから呼んだ。急な依頼だったことや、ユトレヒトで線路工事があったことなどから、その代理の手話通訳の方は40分遅刻したが、その間教授も准教授も院生もみな、議論を始めることなく、手話通訳者を待ち続けた。おのおの黙って待つのではなく、ろう者も聴者も手話で世間話をしながら、この40分間を過ごしたのだった。

私は国際手話を話すことができない。このデータセッションには、たまたまろうの韓国人留学生(博士後期課程)がおり、この40分間の待ち時間の間、彼が私の話し相手をしてくれた。歴史的な背景から韓国手話は日本手話に近い手話言語である。彼は私の日本手話と国際手話の混じった表現を読み取ってくれ、私は何とかこの40分をやり過ごすことができた。日本で同じ状況が発生したら、どうなっただろうか。40分も遅れることが見込まれる手話通訳者。教授も准教授も院生も一堂に会した場。聞こえる人のほうが

¹ 本稿は次のエッセイを加筆修正したものである。坊農真弓(2016)「誰もが議論に参加できる言語環境」『人工知能学会誌』Vol.31, No.6, pp.967-968.

^{†1} 国立情報学研究所

National Institute of Informatics
^{†2} 総合研究大学院大学
SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)

聞こえない人よりも人数が多い場面。もしかすると、聞こえる研究者が音声発話と拙い手話で徐々に議論を始めてしまったかもしれない。私は日本で実際にそういう状況を目にしたことがある。しかしこれでは、手話を生活言語とするろう者を、学術的な議論から置き去りにしてしまう。手話が独立した言語であることが共通認識となっているコミュニティでは、手話通訳を待つという判断をするのが当然のことなのだろうと思う。

2. 日本での手話研究

日本ではこういったろう者と聴者が対等に国際的な研究活動をする風景はあまり見られない。見られない理由として、(1) ろう者が大学や研究機関で高等教育を受ける機会が与えられてこなかったこと、(2) 経験豊富な手話通訳者を会議に呼ぶ窓口ややり方が共有されていないこと、(3) ろう者が国内のみで通じる日本手話だけで議論をしており、アメリカ手話や国際手話を学ぶ機会が少ないこと、などが挙げられるのではないだろうか。もちろんこれだけではない。ろう者のための高等教育の状況は非常に複雑で理由を一つに定めることを本稿では目的にしている。以下では、この三つの理由について、少々細かく私の経験を話したい。

2.1 ろう者が大学や研究機関で高等教育を受ける機会が与えられてこなかったこと

いま、私の研究室には手話を生活言語とするろう者の院生がいる。彼と私の一対一のやりとりは日本手話で進めているが、研究室ミーティングの事務連絡部分は研究室メンバーが持ち回りで PC 通訳している。より高度な内容が議論されるプロジェクトミーティングや講義には、経験豊富な手話通訳者を 2 名呼び、20 分交替で手話通訳をしてもらっている。これらの試みはろう者が大学や研究機関で高等教育を受けるとはどういうことかを自分自身が知るための実験的な側面がある。実験といってしまうと、この院生に申し訳ないのだが、その都度自由に意見を言ってもらい、理想的な言語環境を探求する試みを続けている。

研究室のメンバーが持ち回りで実施する PC 通訳は、「どのような日本語を話せば、要約筆記しやすいか」を聴の院生やスタッフが理解するのに役立つ。また、経験豊富な手話通訳者による通訳は、学術的な内容を共有するのに欠かせない。しかし、それだけで十分だろうか。以前、東大の福島智教授にインタビューをしたとき、非常に興味深い指摘があった。以下である。

「日常的に通訳を入れてもらうように訴えるという活動が大切なのです。また通訳は授業や会議の大事な場面だけを訳すのではなく、休み時間などのカジュアルな情報も訳すことが大切です。その理由は、人事などの大事な話の多くは、会議途中の休憩時間に決まったりすることがあるからです。それと、例えばエレベーター

ターで乗りあわせた時の数秒とか 10 秒間くらいのちょっとした雑談で、意外と重要なことが動いていったりしますよね。」

点線を付した箇所は、インタビュー原稿を編集する中で、福島氏によって挿入された。この文章を挿入する際、福島氏から私に次のようなコメントがメールで送られた。

「これはもし字数があればいただければうれしい、という程度のもので。ただ、この件はすごく痛感していることです。おそらく私以外のほとんどの盲ろう者や多くのろう者は、こういうちょっとした「ぼそぼそ会話」とでもいうものの通訳を受けていないと思いますので。」

2015.3.6 福島氏から坊農へ送られたメールの一部
坊農[1]

私はこのやりとりから「ぼそぼそ会話」が持つ威力を実感し、また手話に限らない言語通訳場面における雑談通訳の重要性がどの程度認識されているのだろうと気がかりになった。「エレベーターに乗りあわせた時の数秒とか 10 秒間くらいのちょっとした雑談で」ものごとは動く。私たちの日常はこうしたちょっとした雑談で回っている部分が多い。私の研究室の試みは未だ半ばだが、ろう者が大学院で学ぶための、そして聴の研究仲間とフェアな関係を構築できる言語環境を日々模索している。

2.2 経験豊富な手話通訳者を会議に呼ぶ窓口ややり方が共有されていないこと

どうすれば経験豊富な手話通訳者を確保し、ろう者が大学や研究機関で高等教育を受ける環境が整備できるのだろうか。私の場合は、手話通訳の方を通じ、徐々に高度な内容の手話通訳を信頼してお願いできる手話通訳者と繋がっていった。現在私の研究室は 10 名前後のフリーランスの手話通訳者の方々に個別に手話通訳を依頼している。東京には手話通訳派遣を実施している民間団体もあるが、あまり詳しい情報はインターネットには出ていない。また、1 対 1 のやりとりではなく、1 対多で話す講演などには講演者の音声発話に PC 通訳が準備されることがある。PC 通訳はいくつかの民間団体が実施しており、見積もりを依頼して利用を検討することも可能である。

こういった手話通訳や PC 通訳といった情報保障の情報を統合的に扱う組織や団体があればいいと思っているが、残念ながら現在そういった団体は存在しない。

では、オランダの場合はどうだろうか。オランダは、日本における東京の状況と類似して、アムステルダムなどの中心都市に経験豊富な手話通訳者が集中している。私が滞在していたナイメーヘンはアムステルダムから電車で 2 時間程度の場所に位置する。そうすると、手話通訳者に長距

離移動を強いるため、交通費のみならず 1km あたり 60 セント換算で拘束料金を支払っていると聞いた。学術的な内容を通訳できる人物の確保はどこでも重要な問題なのである。

近年日本でも同じような考え方で経験豊富な手話通訳者の方々に遠距離移動を依頼することが増えてきた。しかし、拘束料金の支払いなどは稀である。拘束料金の支払い基準や謝金の基準が徐々に定まれば、経験豊富なフリーランスの手話通訳者の方々もより豊かに仕事ができるのではないだろうか。

2.3 ろう者が国内のみで通じる日本手話だけで議論をしており、アメリカ手話や国際手話を学ぶ機会が少ないこと

そして最後に、陸続きの隣国を持たない日本において日本手話を使って議論することについて触れたいと思う。日本語と同じで日本手話もまた、海外で通じない言語である。例えばアメリカにはアメリカ手話があり、オランダにはオランダ手話があり、各国が独自の手話言語も持っている。学術的場面では、アメリカで開催される国際会議にはアメリカ手話の通訳が準備され、ヨーロッパで開催される国際会議には国際手話をつけられたり、ヨーロッパの各国の研究者が自分の国の手話通訳を自分の研究費を使って連れてきて、壇上の横で通訳させたりしている。

数年前に出席したロンドンで開催されたお手話コーパスのワークショップでは、5,6 人の異なる手話の手話通訳者が壇上に立って同時に自国の手話に通訳をしている場面を見た。彼らは講演者の音声英語をある通訳者はスウェーデン手話に、またある通訳者はスイス手話にそれぞれ通訳していた。日本には、音声英語から日本手話に通訳できる通訳者は片手で数えるほどしかない。音声英語から日本手話に通訳できる通訳者を確保できなかった場合、まず音声英語から音声日本語に通訳する通訳者を置き、音声日本語から日本手話へ通訳する通訳者を置くという二段階通訳(リレー通訳)をすることがある。二段階通訳を利用すると、当然通訳に時間を要し、リアルタイムで質疑応答することが難しくなる。また、二段階通訳される中で発言者の本当の意図が伝わらなくなることも懸念される。

こういった状況の中、手話言語学の第一線で活躍する日本のろう者の研究者は国際手話やアメリカ手話を習得して、国際会議等に参加している。しかし、そういった国際的な活動を進めているろう者はそれほど多くない。オランダに滞在してみて、ヨーロッパにおける国際手話の力、すなわち国を超えてコミュニケーションできる力を見せつけられ、日本国内だけで通じる日本手話で議論しているだけは、国際的な場面での研究活動は難しいとあらためて感じた。大学院で学ぶろう者がアメリカ手話や国際手話を身につけられる環境の整備が急務である。

3. 日本におけるアクセシビリティ研究

日本では 2016 年 4 月、障害者差別解消法が施行された。ろう者が大学や研究機関で高等教育を受け、議論に参加できる言語環境の早期構築が望まれている。本稿で私の実体験に基づいて紹介したような、欧米各国における言語研究のためのろう者を取り巻く言語環境は、「究極の理想形」かもしれない。この言語環境は、言語に興味を持つ言語学者たちが作り上げたものであるからこそ、マイノリティに対する配慮や社会的なふるまいが整っているのではないだろうか。

先述した、ろう者と聴者が対等に国際的な研究活動をする風景があまり見られない三つの理由に対し、次のような改善ができるかもしれない。(1) ろう者が大学や研究機関で高等教育を受ける機会が得られるように、ろう者やその他の障害を抱える学生を受け入れた経験がある大学や研究機関がその体験や解決すべき課題を共有する場所を作る。(2) 経験豊富な手話通訳者を会議に呼ぶ窓口ややり方を共有するために、それに適した組織が情報をまとめてネットワークを構築する。(3) 国内のみで通じる日本手話だけで議論し、国際的な学術場面から取り残されないために、手話を生活言語とするろう者や手話を研究題材とする研究者は、国際手話やアメリカ手話のスキルをつける。(1)については、情報処理学会アクセシビリティ研究会第二回研究会において、「大学の障害学生支援センターの取り組み」をテーマとしたオーガナイズドセッションを企画した(2016 年 12 月 2,3 日、於国立情報学研究所)。(2)については、これまでいろいろと手話通訳コーディネートの経験を重ねてきた私やその周辺の研究者らが、いつかすべき仕事かもしれない。(3)については、すぐに変えていくことは難しいかもしれないが、海外から手話関連研究者を招くなどして、日本の手話に関連する様々な研究に刺激を与えていく地道な活動が必要かもしれない。

どれもすぐには改善できそうにない課題ばかりである。しかし、言語やコミュニケーションの問題は人工知能や情報処理の研究が間接的にでも支援できることがあるのではないだろうか。オランダで私が体験した言語環境は、私の今後の研究活動や言語使用に大きな影響を与えようである。

謝辞 本研究は平成 28 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)、国際共同研究加速基金(国際共同研究加速強化)「手話相互行為分析のための言語記述手法の提案(代表者：坊農真弓)」(15KK0068)によって支援された。

参考文献

- [1] 坊農真弓 (2016). 「手話雑談におけることばと身体とマルチアクティビティ」村田和代・井出里咲子編『雑談の美学』, pp. 97-118. ひつじ書房.